

日本の詩歌

29

短歌集

中央公論社

日本の詩歌 29

©1970

短歌集

昭和45年2月5日初版印刷

昭和45年2月15日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵写真印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 協和製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

森鷗外	9
佐佐木信綱	14
服部躬治	28
尾上柴舟	33
宇都野研	47
山川登美子	56
新井 洸	61
吉植庄亮	66
三ヶ島葭子	75

橋田東声
半田良平
岩谷莫哀
岡本かの子
松村英一
植松寿樹
石井直三郎
中村三郎
結城哀草果
村野次郎
小泉蓼三

171 162 153 148 139 130 116 107 102 93 84

吉野秀雄	吉田正俊	五味保義	大熊長次郎	穂積忠	筏井嘉一	鹿兒島寿藏	五島美代子	藤沢古実	松倉米吉	土田耕平
------	------	------	-------	-----	------	-------	-------	------	------	------

258	249	240	235	226	217	208	199	194	189	180
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

福田栄一	斎藤史	窪田章一郎	渡辺直己	折口春洋	坪野哲久	木俣修	生方たつゑ	柴生田稔	前川佐美雄	明石海人
------	-----	-------	------	------	------	-----	-------	------	-------	------

351	342	333	328	322	313	304	295	286	277	272
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

佐藤佐太郎

360

宮 柁二

360

近藤芳美

378

解説

山本健吉

鑑賞

佐佐木幸綱

香川 進

久保田正文

馬場あき子

森脇一夫

近藤芳美

斎藤正二

近代短歌史年表

短
歌
集

森 鷗 外

独漉のみづは濁れり濁れれど洗ひし太刀は霜と冴え冴ゆ

雨衣につつめる顔をのぞきあひてことほぎかはすつはものの友

上に着る緋の裏にじむ沾衣血染になりぬ手はおはねども

亡友をおもふ涙の絶えねばかひとへ沾衣あぶれどもひぬ

沾ごろも家にやらばや道すがら友をうしなふ旅のしるしに

黍がらの蚊火たく庭によこたへし扉のうへにうまいす我は

南山の裾野小道にこそ見つる馬蘭はさきぬ鉄嶺の北に

森鷗外（文久2・1・10〜大正11・7・9）鳥根県に生れた。本名森林太郎。「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」と有名な遺言にある。東京大学医学部卒業後、陸軍に入り軍医総監まで進んだ。短歌史上の運動としては、明治三十九年、井上通泰、佐佐木信綱らに働きかけて常磐会を興し、同四十年、与謝野寛、伊藤左千夫、佐佐木信綱らとともに自邸で開催した観潮楼歌会がある。特に後者は、石川啄木、北原白秋、斎藤茂吉ら、当時の新進のちに参加することとなり、近代短歌史上忘れることのできない場になった。短歌作品は『うた日記』『沙羅の木』の一部として計四百三十余首、その他『明星』『スバル』誌上に発表したもの、常磐会に出された作品などがある。

「独漉の」以下九首は、日露戦争

青空のもとに露けき黍畑やあさひ浴み立つ黄牛ひとつ

朝日さす畑の高黍まだ低きなかくさざる紺青のひとつ

(以上『うた日記』より)

隔てつる垣はくづれて庭も野も一つ薄になりにつけるかな

砕けたる瓦ふみゆく古里のすすきの中に残るいしずゑ

折れのこるコリントがたの石柱すすきのなかに白くかがよふ

ちりぼへる文の上ゆく小鼠を寝たるふりしてしばしまもりぬ

米倉の鼠のもとにこぼれ麦あさる既の鼠とつぎぬ (以上『常磐会詠草』より)

一殺那千もとの杉のおほ幹とふもとの湖と見する稲妻

草藉きて臥すわが脈は方十里寝ねたる森の中心に搏つ

夜の森の刻めるごとき輪廓のうへにまたたく白がねの星

万人の肩すりてゆく白昼の大路さびしく足は疲れぬ

従軍中の作である。鷗外は明治三十七年四月から同三十九年一月まで奉天、旅順など大陸各地を軍とともに転々とした。この間、詩、短歌、俳句を心のおもむくままに記し、家族友人への便りにそれを記したり、『心の花』『明星』などの雑誌に発表したりしたが、後に『うた日記』と題して二冊にまとめた。この九首はその中から抄出したものである。戦場、傷兵、野營、大陸の風物が一種のヒューマニズムの視点でうたわれており、したがって血なまぐさい荒涼とした感じは少く、ロマンティックな空閒氣さえ感じられる。

一編てつる一以下五首は常磐会の詠草。前五首は「故郷薄」、後二首は「鼠」の題詠。題をきめておき参会者はその題をテーマに短歌を詠んだわけである。

「一殺那」以下八首は「一殺那」

わが足はかくこそ立てれちゆうりよく重力のあらむかぎりわたくしを私しつつ

火の影をひたとまもりて歩み出づる森ゆ我あを呼よぶ前さきの世の友

しめりたる土を足踏みやみ闇に立つ墓より墓に手触でかれて行きぬ

獣けもの追ふせこ森に入るわきもこが寝ねきたれ髪かみにわが指おし入る

永遠えいゐんの鼓つづみひびきぬくろがねの壁かべみな靡なびきわれ去るひとり

天地あめつちを籠こめたる霧の白濁はくたくの中に一点赤いってんき唇くちびる

波を切るかの白鳥しらとりの鉛直さんちよくに立てたる首の動かさる見よ

月の夜の塔たかよりぞ見し家むらの黒きを縫ぬいへる白き町々まちまち

斑駒ふちこまの骸がくろをはたと抛なげちぬ Olympus なる神のまとるに

雪のあと東京といふ大沼おほぬまの上に雨ふる風色かぜいろの日

重こき言ことやうやう出でぬ吊橋つりはしを渡らむとして卸おろすがごとく

と題して『明星』(明治四十年十月号)に発表された連作三十一首中のもの。次の『舞扇』の一連などとともに、幻想的な雰囲気と、われわれ現代人からみればややロマンティズムに溺ひたれすぎの感じながらも、鮮明なイメージとをよめてとることができぬ。

「永遠の」以下四首は『舞扇』(『明星』明治四十一年一月号)の十四首中からの抄出。

「斑駒の」以下十五首は『スバル』五号(明治四十二年五月)に発表された『我百首』中のもの。象徴的な手法にリルケの影響があるという。前年からこのころにかけての鵲外の日記の第一土曜日の欄には「夜短歌(詩)会を催す」としはしとあり、観潮楼歌会隆盛時の制作になることがわかる。『沙羅の木』(大正四年刊)の序で『我百首』に触れた部分を引用し

寡慾^{ふよく}なり火鉢^{ひばち}の縁^ひに立ておきて煖^{あた}まりたる紙卷^{しまき}をのむ

おのがじし靡^{なび}ける花^{はな}を切り揃^{そろ}へ束^{たば}に作りぬ兵卒^{へいそく}のごと

黙^{もく}あるに若^しかずとおもへど批評家^{ひひうか}の餓^うゑんを恐れたまさかに書く

今来ぬと呼べばくるとこち向きぬ回轉^{かいせん}椅子^{いす}に掛けたるままに

大多數^{たさう}まが事にのみ起立^{きりつ}する会議^{かいぎ}の場^ばに唯^{ただ}列^{りつ}び居^をり

をりをりは四大^{しやうだい}仮合^{かがふ}の六尺^{ろくせき}を真直^{ましく}に堅^たてて譴責^{けんせき}を受^うく

写真^{しやしん}とる。一つ目小僧^{こしやうそう}こはしちふ。鳩^{はと}など出^でだす。いよよこはしちふ。

書^{かき}の上に寸ばかりなる女^{をんな}来てわが読^よみて行く字^じの上^{うへ}にゐる

狂^{くる}ほしき考^{かんが}へ浮^うぶ夜の町^{まち}にふと燃^もえ出^でづる火事^{かじ}のごとくに

我^{われ}足の跡^{あと}かとぞ思^{おも}ふ世^よ々^々を歴^へて踏^ふみ窪^{くぼ}めたる石^{いし}のきざはし

Wagner はめでたき作者^{そくしや}ささやきの人に聞^{きこ}えぬ曲^{きょく}を作りぬ

ておく。『我百首』と題する短詩は、長い月日の間に作ったものを集めたのでもなく、また自ら選んだのでもない。あれは雑誌昂^{かう}の原稿として一氣に書いたものである。そのころ雑誌あららぎと明星とが参商のごとくに相隔^{あひは}っているのを見て、私は二つのものを接近せしめようと思つて、双方を代表すべき作者を觀潮^{くわうしやう}楼^{ろう}に請待^{しょうたい}した。この毎月一度の歌会はいぶ久しく続いた。我百首を書いたのはその隆盛時代^{りやうせい}に當^{あた}っている。

「をりをりは」の歌についての与謝野晶子^{よせのあきこ}の訳がある。「もともと地水火風の四大元素^{しやうだいぶつ}が仮りに集まつて出来た六尺の体だ。叱る者も叱られる者もないわけだ。それが折々に直立の姿勢をとって上官の前で譴責^{けんせき}を受けねばならなかったりする。へんなものである」(『晶子歌話』)

我詩皆けしき贖物ならざるはなしと人云ふ或は然らむ

奈良山の常磐木はよし秋の風木の間木の間を縫ひて吹くなり

奈良人は秋の寂しさ見せじとや社も寺も丹塗にはせし

鳶かづら絡む築泥の崩口の土もかわきていさぎよき奈良

敕封の笋の皮切りほどく剪刀の音の寒きあかつき

夢の国燃ゆべきものの燃えぬ国木の校倉のとはに立つ国

戸あくれば朝日さすなり一とせを素絹の下に寝つる器に

唐櫃の蓋とれば立つ絶の塵もなかなかなつかしきかな

ひたすらに普通選挙の両刃をや奇しき剣とたふとびけらし

咥らじな汝が偶像の平等にささげむ牲は自由なりとは

貪欲のさけびはここに帝王のあまた眠れる土をとよもす

「奈良山の」以下十首は大正十一年第二期「明星」三号に発表された「奈良五十首」中の作品。鴈外の短歌はこの連作が最後のものがある。連作第一首目は「京はわがまづ車よりおり立ちて古木あさり日をくらす街」であり、「我百首」の世界とは全く異なった日本的な世界がしみじみとうたわれている。「敕封の」以下四首は正倉院御物拝観の作。厳肅さの中に人間的なあたたかみを感じさせる佳作である。

最後の三首は、古都奈良で尾崎行雄らが当時提唱した普選運動の宣伝に出くわしたときの作。佳作とは言えまいが、鴈外の一面を思わせる作品なので抄出しておいた。

『鴈外全集』岩波書店昭和十三年版第一巻を底本とした。

(佐佐木幸綱)

佐佐木信綱

鳥の声水のひびきに夜はあけて神代に似たり山中の村

地の底三千尺の底にありて片時やめぬつるはしの音

願はくはわれ春風に身をなして憂ある人の門をとばや

声ひくしひくくしあれど真心のこゑ天地にとほらざらめや

幼きは幼きどちのものがたり葡萄のかげに月かたぶきぬ

蘭の花のかをりめでたしすがすがしよき人來べきよき夕べなり

春の日の夕べすがに風ありて芝生にゆらぐ鞦韆のかげ

佐佐木信綱（明5・6・3）昭

38・12・2）三重県鈴鹿市に生れた。父弘綱に学び幼年時代から短歌に親しんだ。和歌革新運動に際し早く竹柏会を組織し歌誌『心の花』を明治三十一年に発刊、『ひろくふかくおのがじしに一の指導原理のもとに、短歌の普及と後進の育成に努め、石樽千亦、木下利玄、新井洗、川田順、前川佐美雄ら多数の歌人を世に送った。一方、和歌史の研究、万葉集の研究にも情熱を注ぎ、『日本歌学史』『万葉集評釈』などの著述がある。歌集は『思草』以下九冊、生涯の著作は二百二十六部三百九冊（うち三十七部八十二冊は合著）に及んだ。大正六年学士院恩賜賞、昭和六年朝日賞、昭和十二年文化勲章を受章した。

『鳥の声』の歌以下、第一歌集『思草』の作。『思草』は明治三十